

「大山詣り」(四百年続くビジネスモデル)

池田 隆

ゆっくりと延べ十五日をかけて、老妻と大山街道を歩き通し、「大山詣り」の歴史的経緯について知見をやや広めた。

「大山」は丹沢山塊の東南に位置し、流麗な姿が眺める者に神々しい気持ちを抱かせる。頂上で祭祀に用いた縄文土器も発掘されたという。古来より石をご神体とする阿夫利神社が祀られている。雲がよく懸かるので「雨降り神社」とも呼ばれる。

仏教伝来後は神仏習合で近くに大山寺が建立され、神官、僧侶、山伏、宗徒らで賑わってきた。頼朝が戦勝祈願に刀を奉納した逸話が有名だ。小田原北条氏の尊崇も受け、強力な僧兵が関東支配の軍事的後継者にもなったらしい。

家康は江戸への移封に際し武力の残存を恐れ、神官僧侶以外の宗徒の下山を命じた。失業した宗徒たちは山麓に各々が宿坊を建て、勝手知った江戸や関東一円に出掛け、「大山詣り」を宣伝する旅行者(ガイド)に転身する。

彼らは御師(先導師)と呼ばれた。因みに「師走」という言葉は年末に御師が営業活動で走り回ったのが由来ともいう。主な顧客は「講」と呼ばれる職業別、地域別の相互扶助団体だった。とくに高所や海上から大山を眺める機会の多い火消し、鳶、大工、漁業者などが大得意先となる。

箱根関所の手前に位置し通行手形が要らず、帰途に江ノ島や藤沢宿場を周遊することもできたので、比較的手軽な数日間の観光ツアーとして江戸中期以降に非常な人気を博した。江戸の人口が百万人の時代に、年間二十万人が訪れたという。

現在も数十軒の宿坊が講と結びつき、割烹旅館として堅実に営業を続けている。今回の大山詣りで最も驚いたのはその現状である。

四百年も続くこのビジネスモデルをボトムアップで考え出し、実行に移した先人達の偉業に比べ、「コロナ禍」という異常事態においても、短期的な「のり」キャンペーンといったトップダウンの方策しか思いつかないのは何とも情けない。せめてこのビジネスモデルを現代社会にマッチするよう改善を行いたいものだ。